

玉田芳史 著

『民主化の虚像と実像——タイ現代政治変動のメカニズム』

京都大学学術出版会 2003年 viii+364ページ

浅見 靖仁

玉田氏のこの著作は、持久力、技術力、瞬発力がそろった力作である。本書はその主な焦点を1990年代のタイ政治に当てているが、戦前から最現代にいたるタイ政治を膨大なタイ語資料にあたりながら丹念に調べ続けて来た玉田氏ならではの長期的視野が随所に活かされており、その持久力がいかんなく発揮されている。

2000年の上院選挙と01年の総選挙の分析には、選挙管理委員会のタイ語のウェブサイトに掲載された詳細なデータを利用するなど、インターネット上のタイ語情報をも最大限活用しているところには玉田氏の技術力もいかんなく発揮されている。近年、タイの公的機関及び民間団体によるインターネット上での情報公開・情報提供はめざましく進んでおり、今後のタイ研究にはインターネット上のタイ語情報を利用するノウハウが不可欠なものとなりつつあることを改めて強く感じさせられる。

瞬発力とは、この著作によって何かを訴えたいという強い気持ちのことである。この著作からは著者が1990年代のタイ政治及びそれに関する言説に大きな憤りと不満を抱いていることが強く感じられ、そのことが詳細な実証的データが次から次へと示され続けるにもかかわらず、本書を無味乾燥なものとはせず、熱い勢いを感じさせるものとしている。

本書は、タイ政治に関心を持つ者にとってこれから長くにわたって必読書の1つであり続けるであろう。資料集としての価値も高く、また本書の随所に見られる鋭い分析は、示唆に富むものが多い。本書が非常にすぐれた研究書であることは、本書を一読すれば誰の目にも明らかであろうから、以下本稿ではあえて主にその問題点に焦点を当てて論じることとする。

I 本書の構成とあらすじ

本章は7つの章からなる。このうち2章から6章が細かい事実について述べた実証的な章で、これらの章はそれぞれ独立した論文として読むこともできる。特に軍の人事異動に関する詳細なデータに基づいて1990年代に軍の政治的影響力が低下した理由について考察した3章は出色の出来であり、英語やタイ語で書かれた文献を含めても、タイにおける軍の政治的影響力低下に関する最も優れた研究の1つだと言える。

2～6章を大きな筋書きに添ったものにしようという試みがなされているのが、1章と終章である。そこで打ち出されているストーリーの大筋は、タイの中間層は一般には民主化の立役者だと見なされているが、それは「虚像」に過ぎず、1990年代のタイにおいては、中間層は民主化の最大抵抗勢力として民主化の足をひっぱったというのが「実像」であるというものである。本書はその書名にも「虚像」と「実像」という言葉が使われており、また本文中にもこの2つの言葉が頻出する。

2～6章の実証的な章は、この大きな筋書きの中では、以下のように位置づけられる。1992年のスチンダー退陣要求運動を描いた2章では、中間層がこの運動の重要な担い手であったという「虚像」を破壊し、中間層は新聞などのメディアによってこの運動の立役者であったかのように祭り上げられたにすぎないという「実像」を明らかにする。3章では軍の政治力が低下した過程を明らかにすることによって、90年代半ば以降のタイにおいては軍は民主化の主要抵抗勢力としての力を失っていたことを示す。これは90年代半ば以降のタイにおける民主化の主要抵抗勢力は中間層であったという議論を展開するための伏線となるものである。4章は、97年憲法の起草過程と新憲法の内容について詳細に分析することによって、97年憲法はその起草のされ方においても、また内容についても非常に民主主義的な憲法であるという「虚像」を破壊し、かなり非民主主義的な憲法であるという「実像」を明らかにする。5章は、2000年の上院選挙の結果を分析し、それまで官選だった上院が民選となったことによって、民主化がさらに進んだという「虚像」を破壊し、選挙によって選ばれた新しい上院もその実態は官選時代の「公務員議会」の再現にすぎないというのが「実像」だと主張する。2001年の総選挙とその結果成立したタクシン政権を分析した6章では、その冒頭で「本章では、政治改革の狙いが選挙、政党、組閣などに関していかほど実現されたのかを考察してみたい」(p.257)と述べ、「結論を先取りするならば新憲法の狙いはかなり実現された」(p.258)としている。著者によれば、90年代の一連の政治改革や新憲法は民主化を促進するものだったというのは「虚像」で、反民主主義的な中間層が民

主化の進展を阻止するために巧みに仕組んだ異だったというのが「実像」なので、政治改革や新憲法の狙いが実現したということは、そうした反民主主義的な中間層の企てが成功したことを意味し、したがってタイの民主化は非常に中途半端なものに終わってしまったということの意味する。そしてそのことに著者は非常に強い憤りを表明しているのである。

II ア・プリアリ論の呪縛

著者は、1章1節「本書の狙いと構成」で、「中間層は民主化を希求するとア・プリアリに想定し、民主化を主導したのは中間層であると捉える点には強い違和感を禁じえない。…本書では、タイ研究者やタイ人知識人の間で人口に膾炙する、中間層を過大視する虚像に代わる実像を描き出そうと試みる。」(p.4)と述べている。

タイの民主化に関して、安直な中間層礼賛論が一部で流布したことは事実であり、そのことに著者が憤りを感じることは理解できる。しかし怒りのあまり攻撃対象を冷静に見つめることをやや怠ってしまったようにも感じる。「中間層は民主化を希求するとア・プリアリに想定」することと、90年代のタイにおいて「民主化を主導したのは中間層であると捉える」ことは同義ではない。中間層がア・プリアリに民主化を求めるわけでないことは、古くはナチス・ドイツに関する一連の研究によって、またタイ政治研究においてもアンダーソン [Anderson 1977] やチャイアナンら [Morell & Chai-anan 1981] による76年の反民主化クーデタに対する中間層の反応についての研究などによって指摘されていることである。90年代についても、タイの中間層が常に民主化を支持したわけではないことはすでに多くの論者が指摘している。

著者が考察すべきだったのは、一線の研究者の間ではすでに決着のついているア・プリアリ論の成否ではなく、中間層はどういう場合には民主化を支持し、どういふ場合には傍観し、どういふ場合には反対するのかということであったと思われるが、残念ながら本書ではこれらの点についての考察は行われておらず、ア・プリアリ論への反論に終始してしまっている。このため本書は、人口の多数を下層が占めている限りは、タイの中間層は常に民主化には消極的な態度をとるといふ逆ア・プリアリ論に陥ってしまっているようにさえ感じられる。

III ベールに包まれたままの民主化推進勢力

1990年代のタイにおいて、中間層は民主化推進勢力ではなく、民主化抵抗勢力であったとすると、それでは誰が民主化推進勢力だったのかという問いが当然思い浮かぶ

が、著者は敢えて意識的にこの問いには答えようとしていない。著者は1章において、ルスマイヤーらの議論 [Rueschmeyer *et al.* 1992] に言及しながら、「民主化にとっては民主化に消極的な勢力が重要である」(p.26)と論じ、「本書では民主化の積極的な推進派と目される勢力の活躍よりも、そうした消極派や反対派の慰撫を重視する観点からタイの民主化を90年代を中心として考察したい。」(p.27)と述べている。

民主化においては、消極派の動向が重要な意味を持つということは、著者が言及しているルスマイヤーだけでなく、オドンネルとシュミッターらによる一連の民主化の比較研究 [O'Donnell & Schmitter 1986] やハンチントンの『第3の波』 [Huntington 1991] の中でも指摘されていることであり、それは全くその通りであろう。しかしそのことは積極派についての分析をおろそかにしてもいいということの意味するものではない。消極派に譲歩してでも民主化を実現したいと考え、また実際にそのための行動もしたのは誰なのかということは重要な問題であろう。しかし本書では、主な焦点は消極派にのみ当てられ、積極派についてはほとんど語られていない。

積極派には焦点を当てない理由について、著者は「はしがき」の中で、「タイ政治研究ではすでに1990年代以前から民主化の積極的な推進勢力を探し出すことに精力が注がれてきた。90年代にはそうした格好の推進派として都市中間層が浮上してきた。80年代までは政党、政党政治家、実業界、学生などがそうした勢力と見なされることが多かった。90年代に入って推進派と見なされるものがすっかり変化してしまったことに示されているように、推進派探しは必ずしも有益な作業とは思われない。むしろ、好ましいはずの民主政治がなかなか実現しなかったのは反対勢力や抵抗勢力が存在していたからであり、そうした消極勢力にも目を向けるべきであろう。そこで、本書では民主化に消極的な勢力、不満を抱える勢力を宥めることにより進められてきたという視点を重視したい。」(p.iii)と述べている。

1980年代と90年代とでは、推進派としてあげられている集団に違いがあるから、「推進派探し」は有益な作業ではないという主張は、なぜ時代によって推進派が異なると「推進派探し」は有益な作業とはいえなくなってしまうのかについての説明がなく、説得力の弱いものとなっている。「消極派」については、著者は80年代には民主化に対する主要な消極派は軍だったが、90年代には発言力の低下した軍にかわって中間層が主要な消極派になったとしており、主要な担い手が時代によって異なるような「派」を探すことは有益な作業ではないというなら、「消極派」探しも有益な作業ではないことになってしまわないだろうか。

民主化推進勢力については、終章の中で90年代の政治改革論の総括を行っている部

分で少しだけ言及されている。著者は90年代の政治改革論の主要な担い手には、①官僚、②中間層、③ NGO 活動家の3つのグループがあったとし、このうち前二者は、民主化がさらに進展して自分たちの発言力が低下することを防ごうとして、民主化にブレーキをかけるような政治改革を要求したのに対し、最後のグループだけが、まだ民主化は不十分であると主張し、民主化の恩恵が社会的経済的弱者にも十分に行き渡るような政治改革を要求したと述べている (pp.328-329)。政治改革の必要性については意見が一致していたものの、具体的な政治改革の進め方をめぐっては「中間層と NGO は利害が対立していた」(p.329)とも述べている。

しかし NGO に参加しているのはどのような人たちで、それがどのように組織され、なぜ彼らはさらなる民主化を要求したのかについては考察していない。NGO 活動家には中間層出身者が多く、その支持者にも中間層が多いことや、政治改革をめぐっては NGO の間にもさまざまな意見の対立があったこと、また NGO と農民団体などの PO との間の軋轢などについても言及していない。NGO と中間層の多数派との意見の相違は事実である。しかしそれは NGO と中間層との対立を示すものとしてよりも、中間層は一枚岩ではなく、政治改革や民主化には中間層内にもかなりの意見の違いがあったことを示すものと考えた方がよくないであろうか。

中間層が政治的態度及び行動に関して、決して常に一枚岩的存在であるわけではないことは、すでに多くの先行研究が指摘していることであるが、本書ではほとんど常に中間層は一枚岩的存在として扱われており、その点でも先に述べたような中間層逆ア・プリアリ論にやや陥ってしまっているように感じられる。

IV 一次元的民主主義論と多次元の民主主義論

著者は1章において、タイ政治の文脈に合わせて民主主義の要件を具体的に示すと、「①競争的で公正な選挙が実施され、②選挙により国会の多数派が変化して政権交代が実現し、③選挙で選ばれた国会議員が首相をはじめとする閣僚に就任すること」(p.16)となると述べている。そしてさらに「総選挙が1969年までの長い中断期を除いて数年ごとに実施されてきたにもかかわらず、その結果が組閣にあまり反映されず、民選議員からの入閣者が少なかったのは、閣僚の大半が軍人や行政官によって占められていたからである。選挙による政権交代が実現するためには、選挙結果を反映して民選議員の入閣が増えることが前提として必要であった。それゆえ、民主化がどの時期にどの程度進んだのかを確認する最善の手段は、上記③の閣僚に占める民選議員の割合の推移を調べることである」(pp.16-17)と述べている。

そして歴代内閣の閣僚に民選議員が占める割合を計算した結果から、タイで民主化が大きく進展したのは1990年代ではなく、80年代であり、民主化の移行期は80年代であり、90年代は民主化の定着期と考えるべきだと主張し、90年代は91年のクーデタと92年の5月事件によって一時期「80年代に敷かれたレール」(p.17)から脱線したものの、そのレールはすぐに復旧され、92年以降はレールの上を順調に走って、民主主義の「定着」に向かったと述べている(p.17)。しかしながら、こうした見方に対しては、民主化の進展の度合いを、閣僚に民選議員が占める割合という1つの指標だけによって判断することは適当かどうか、また90年代後半に次々と行われた一連の政治改革を「80年代に敷かれたレール」の上を走っただけのものにとらえることは適当か、という疑問を抱かざるを得ない。

民選議員が閣僚に占める割合は1980年代に19%から87%へと一本調子で増加し続け、90年代も91年と92年の混乱期を除けば80%以上を維持した。100%を越えることのできないこの指標が、80%を超えたあたりで、それまでの一本調子の増加から、横ばい傾向に移行するのはある意味では当然のことではないだろうか。民選議員が閣僚に占める割合は、70年代や80年代については民主化の進展度を測定する有効な手段かも知れないが、すでにその割合がかなり高いレベルに達してしまった90年代についてもこの指標を使い続けることは不適切であるように思われる。

1980年代には選挙で選ばれた国会議員でなくても首相になることが憲法上可能であったのに対し、憲法改正によって首相は選挙で選ばれた国会議員に限られるようになったのも、それまで官選だった上院が民選になったのも90年代に行われた一連の政治改革によるものである。また新聞や雑誌については80年代にもかなり大幅な報道の自由が認められていたが、テレビやラジオにおける報道の自由については90年代に大きな改善が見られた。地方自治体レベルにおける公選制の導入が急速に進んだのも90年代である。こうした変化が全く反映されない民選議員が閣僚に占める割合という1つの指標からだけで、80年代が民主化の移行期、90年代は定着期と判断することには少なからず問題があるのではないだろうか。

また1990年代を定着期と見なすにしても、90年代には民主化は全く前進も後退もしなかったのか、定着の過程で多少は進展したのか、それとも逆に定着の過程で抵抗勢力に妥協したために多少後退したのかという問題は残る。

著者は1章で、「90年代に民主政治を批判したのは都市部住民であった。その批判は必ずしも民主政治の不十分さに向けられていたわけではない。…中間層を筆頭とする都市部住民が支持した政治改革論は人口の7割を占める農村部住民の代表が政党政治

の定着により国政を支配するようになったことに対する都市部とりわけ首都の住民の不満に支えられており、民主主義の深化どころか、官僚支配への回帰という面を多分に備えていた。政治改革論やその産物である97年憲法には、民主化推進派の要求の充足にもまして、政党政治批判派の慰撫という色合いが濃厚なのである。」(p.27)と述べている。90年代のタイにおける一連の政治改革が「官僚支配への回帰という面」も持っており、「政党政治批判派の慰撫という色合い」もあったことについては、評者も同感である。しかしながら、「官僚支配への回帰という面」の方が「民主主義の深化」という面よりも大きく、「民主化推進派の要求の充足」よりも「政党政治批判派の慰撫」という色合いの方が濃厚であったと評価してしまうと、90年代のタイの民主化はさまざまな問題や限界を抱えていたという域を通り越して、そもそも90年代のタイでは民主化は進まず、むしろ若干後退してしまったという総合的評価を下すことになってしまわないであろうか。はたしてそうした評価は妥当なものであろうか。

民主化がいくつかの側面をもつことは比較政治学の分野ではかなり以前から多くの研究者によって指摘されている。ダール [Dahl 1971] は参加の幅と参加の質という2つの次元を区別して論じ、オドンネルとシュミッター [O'Donnell & Schmitter 1986] は参加と自由の2つの次元を区別して民主化について論じている。

1990年代のタイにおいて民主化が進んだかどうかの判断が難しいのは、ある側面に関しては民主化が進んだ一方で、別の側面については民主化が停滞、または後退さえしてしまったことによる。最も顕著な後退は国政選挙の被選挙権を大卒以上の学歴を持つ者に限ってしまったことであろう。しかし他の側面（例えばそれまで官選だった上院の民選化や情報公開法の制定、政府から独立するかたちで設置された国家人権委員会など）においては民主化の進展も見られる。このように分野によって、進展、停滞、後退が混在する場合には民主化の進展具合についてどのように総合的評価を下すかは誰にとっても難しい問題である。

民主化は1つの指標によって測定できるものではなく、複数の側面、複数の次元をもっており、1990年代のタイでは分野によって変化のスピードだけでなく、方向も異なっていたという立場に立つと、本書で用いられている「民主化推進派」と「民主化消極派」の二分法も再検討を要することになろう。民主化のすべての側面に対して積極的な態度をとる集団とすべての側面に対して消極的な態度をとる集団しか存在しなければ、「民主化推進派」と「民主化消極派」に分類することは難しいことではないが、民主化のある側面には積極的な態度をとるが、別の側面に対しては消極的な態度をとる集団がある場合には、その集団を「民主化積極派」と見なすべきか、それとも

「民主化消極派」と見なすべきかは難しい問題となる。

タイの中間層の多くは、民主化のある側面については著者が指摘するように消極的な態度をとったものの、別の側面についてはかなり積極的な態度をとったと言えるのではないだろうか。上院改革を例にとっても、官選だった上院を民選とすることについては中間層の多くはそれを積極的に支持した。しかし彼らはその一方で、上院選挙の被選挙権を大卒以上の学歴を持つ者に限ることも支持した。

著者は5章において、2001年の上院選挙で選ばれた議員に公務員出身者が占める割合は、官選時代と比べても遜色のないほど高いとして、新制度下の上院は官選時代の「公務員議会の再現」に過ぎないと論じ、上院が民選になったことの意義よりも、上院選挙における被選挙権が大卒以上の学歴を持つ者に限られたことの方を重視して、上院改革も中間層の民主化に対する消極ぶりを示す事例として扱っている。しかしながら、官選時代の上院と民選化後の上院が果たしている役割にはかなりの違いがあることを考えると、同じ公務員出身者とは言っても、官選時代の上院では軍の将校や中央省庁の幹部たちが現役のまま上院議員に任命されていたのに対し、民選化後の上院では、官僚や軍の将校が現役のまま上院議員を兼務することはできなくなり、しかも選挙に当選しなければ上院議員にはなれなくなったことの意義を過小評価すべきではないように思われる。

官選から民選になったことによって生じた変化を重視すれば、被選挙権を大卒以上の学歴を持つ者に限ったという非常に大きな減点はあったものの、とにかくそれまで官選だった上院を民選とし、上院の性格を大きく変えたことを考えれば、総合点はマイナスではなくプラスとなると考えることもできよう。そうであれば、少なくとも上院改革については中間層を民主化消極派としてだけ見なすのではなく、不完全ながらも積極派としての役割も果たしたと見なすこともできるのではないだろうか。

V 「実像」の虚像性と今後の課題

最後に本書のキーワードとなっている「実像」と「虚像」について少し述べておくことにしたい。タイの民主化について「虚像」ではなく、「実像」を示すというのが本書の狙いとされている。しかしながら本書が「実像」として示したのものにも「虚像」的な要素が含まれていることは前節までに指摘したとおりである。中間層はア・プリアオリに民主化を支持するというのが「虚像」であるのと同じように、中間層がア・プリアオリに民主化に消極的な態度をとるというのも「虚像」であろうし、中間層は一枚岩的な存在であるというのも「虚像」であろうし、民主化を1つの尺度で測定できる

というのも「虚像」ではないだろうか。

ここで問題としたいのは、本書が示した「実像」は誤った「実像」なのではないかということではなく、そもそも「実像」とは何か、「実像」を示すことは可能かということである。残念ながら本書では「実像」とは何かについて述べられた箇所はない。もし「実像」というのが「現実」を意味するのであれば、よく指摘されるように複雑な「現実」のすべてをありのままに示すことはそもそも不可能であろう。「現実」を本や論文の中で再現しようとすれば、どうしても複雑な「現実」のいくつかの部分だけを抽出してなんらかの抽象化、概念化を行わざるを得ない。

「実像」といっても、それはあくまで「像」であって、「現実」そのものではなく、「現実」をできるだけ忠実に再現しようとした「像」のことであるという解釈もできよう。しかし無数の側面を持つ現実のすべての側面について同じ比率で全体をバランスよく縮小して、現実の小さなレプリカとしてスクリーン上に再投影することは可能であろうか。「現実」にどんなに忠実に像を描こうとしても、実際には現実の無数にある側面の一部分のみに焦点をあてて描かざるを得ず、どんなに努力しても現実をデフォルメしたかたちで像を描くことになるのではないだろうか。もしそうであるならば、像を描く作業をしている段階から、自分はどうのように現実をデフォルメして像を描こうとしているのかということ意識するように努めた方がよくはないであろうか。

どこまでそれが意識的に行われたものかはよくわからないが、「実像」という言葉を使いつつも、実は著者はそれが1990年代のタイの政治変動の一部をかなり大胆に大きくデフォルメしたものであることを十分承知の上で、本書を書いたのではないかと評者は感じている。鼻持ちならない中間層礼賛論の毒を打ち消すために、中間層が併せ持つ革新性と保守性のうちの保守性の部分のみを大きく強調し、90年代の政治改革が併せ持つ進歩的な側面と退行的な側面のうちの退行的な側面の方をあえて大きく強調した像を「実像」と名付けて打ち出したようにも思われるのである。もしそれが本書の隠された狙いだとすれば、本書はその「隠された狙い」を見事に達成している。安直な中間層礼賛論の毒にあたってしまった人には、本書は非常に効果的な解毒剤として作用するであろう。しかし、本書にちりばめられている詳細な実証的データや個々の事象に対する優れた分析を、そのような解毒剤を作ったり、少なくとも研究者の間では死に馬同然の、中間層ア・プリアリ民主化推進勢力説をさらに鞭打つためだけに用いるのは、あまりにもったいない気がする。

次の機会には、民主化を、1つの尺度で測ることができるものではなく、いくつかの側面をもったものとしてとらえ直し、中間層は必ずしも一枚岩ではなく、中間層内

部にも多様な動きが存在していることにも着目した上で、どのような条件の下では中間層のどの部分が民主化のどの側面に対して、どのような態度をとるのかを1つずつ明らかにしていく作業に、タイ政治に対する著者の深く広い知識とすぐれた洞察力が活用されることを期待したい。

参考文献

- Anderson, Benedict R. 1977. "Withdrawal Symptoms: Social and Cultural Aspects of the October 6 Coup." *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol.9, no.3: 13-30.
- Dahl, Robert A. 1971. *Polyarchy: Participation and Opposition*. New Haven: Yale University Press. (邦訳：ロバート・A・ダール著、高島通敏・前田脩訳『ポリアーキー』三一書房、1981年。)
- Huntington, Samuel P. 1991. *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century*. Norman: University of Oklahoma Press. (邦訳：S・P・ハンチントン著、坪郷實・中道寿一・藪野祐三訳『第三の波：20世紀後半の民主化』三嶺書房、1995年。)
- Morell, David, and Chai-anan Samudvanit 1981. *Thailand: Reform, Reaction, and Revolution*. Cambridge, MA: Oelgeslager, Gunn & Hain.
- O'Donnell, Guillermo and Philippe Schmitter 1986. *Transitions from Authoritarian Rule: Tentative Conclusions About Uncertain Democracies*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Rueschmeyer, Dietrich, Evelyne Huber Stephens, and John D. Stephens 1992. *Capitalist Development & Democracy*. Cambridge: Polity.